

有床義歯臨床の疑問に答える (座長抄録)

大久保力廣

Finding relevant answers to clinical questions about removable denture rehabilitation

Chikahiro Ohkubo, DMD, PhD

これまで本学会が主導し科学的根拠に基づいて策定されたガイドラインは、いくつものクリニカルアクションに対して系統的な手法により作成された推奨を明示しており、日々の補綴臨床の中でガイドラインを活用し、踏襲することの重要性は論を俟たない。「歯の欠損の補綴歯科診療ガイドライン」、「有床義歯補綴診療のガイドライン」、「リラインとリベースのガイドライン」等は有床義歯の臨床現場における意思決定の際に、判断材料の一つとして利用しなければならない指南書と言えらる。

しかしながら、それでも日常の有床義歯臨床の各ステップで、私たちは数多くの疑問を抱きながら障壁に突き当たることも事実である。その理由は、すべての補綴治療がエビデンスベースで解決できるものではなく、試行錯誤的に解決を図らなければならない諸問題が有床義歯治療には決して少なくないからではないだろうか。その結果、さまざまな局面で私たちは明確な解答を見つけ出すことができず、疑問を持ち越しながら現場対応的な処置を余儀なくされることになる。

たしかに有床義歯臨床は症例個々の特徴に対応する詳細なエビデンスを構築することも、それらを単簡に集成することも困難な領域なのかもしれない。たとえば、咬合挙上を検討する症例に対して、その適否や方法、挙上量の設定などには、いくつもの回答があるだろうし、咬合挙上された患者が果たしてどのような長期予後を迎えるのかについても明確な回答は得られていない。また、欠損歯列の多様性や義歯構成要素の多彩さから部分床義歯の設計はそれぞれ無限に存在する。ある欠損症例に対して多数の診療オプションの中から選択したひとつの治療法に対して優劣をつけることでさえ、実はそれほど簡単なことではないかもしれない。

したがって、患者サイドの価値を最大限に考慮した共有意思決定 (Shared Decision Making: SDM) と呼ばれる治療方針の決定法が、有床義歯治療では優先して求められるのではないだろうか¹⁾。

当講座では3年制の補綴専門医プログラムを開講しているが、図1はプログラム受講中の女性医局員が担当した症例である。患者の咬合力は強大で、どのような補綴をすればよいのか？どの歯を支台歯にすればよいのか？支台装置は何がよいのか？連結子はどうすればよいのか？メンテナンスは？正直とても迷うケースである。入局2年目の医局員は咬合挙上を提案し、SDMを基に図2に示す咬合床で咬合採得とFGPを描記し、図3, 4のような金属床義歯を装着した。本治療法の適否は別にして、現在も十分な機能回復と患者満足が得られている。このように補綴臨床の各ステップにはさまざまな迷路があり、どの進路であれば成功の出口に辿り着けるのか簡単に論じられるものでもなく、だからこそ有床義歯治療は面白く、複雑、難解と言わざるを得ない。

そこで、第125回(公社)日本補綴歯科学会学術大会では、表題のセッションを企画し、臨床経験豊富な4名の先生方に、臨床医が抱える有床義歯治療における様々な疑問にお答えいただいた。本稿はその講演内容をもとに4名のシンポジストの先生方に要説いただいたものである。

松下恭之先生(九州大学)には、遊離端欠損やすれ違い咬合におけるパーシャルデンチャーの支台歯選択と予後に関する補綴的診断法とインプラント支持の効果的な考え方を、永田省藏先生(九州支部)には各種クラスプやアタッチメントの特性や利点・欠点、テレスコープの具体的な選択基準や注意点およびフォロー

アップの実際について解説いただいた。また、若林則幸先生（東京医科歯科大学）には把持を主眼にした動揺の抑制と強度や衛生環境を考慮した大連結子と小連結子の設計法を、上田貴之先生（東京歯科大学）には経過観察における咀嚼機能と補綴装置の両面からの評価、咀嚼困難に関する原因の究明法や高齢者への対応についてご執筆いただいた。

もちろん、临床上の個々の症例における疑問は単純に括れるものではなく、それらの疑問に対する解答がひとつということもあり得ない。診療ガイドラインをベースにして本稿で提示される多数のヒントや解決法

を参考に、有益性 (Benefit) と有害性 (harm) のバランス、適応と禁忌、原則と例外を勘案するとともに、何が患者にとっての Favorable outcome なのかをよく吟味し、その症例にとっての最善の解答を見つけだしていくことになる。本稿が先生方のこれまで抱いてきた有床義歯臨床のいくつかの疑問を氷解し、明日からの診療のお役に立てれば幸いである。

文 献

- 1) Carr AB, Brown DT. McCracken's removable partial prosthodontics 12ed. Chapter 2; 2011: 8-15.



図1 術前の口腔内。咬合力は強大である

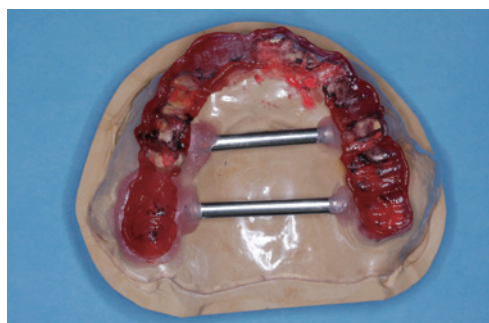


図2 咬合採得と同時にFGPを描記



図3 メタルティースとメタルバックングを用いて咬合挙上



図4 咬合挙上により人工歯の排列スペースも確保できた